

子宮頸がんの予防戦略

世界と日本の現状

柏崎総合医療センター 産婦人科 小林弘子

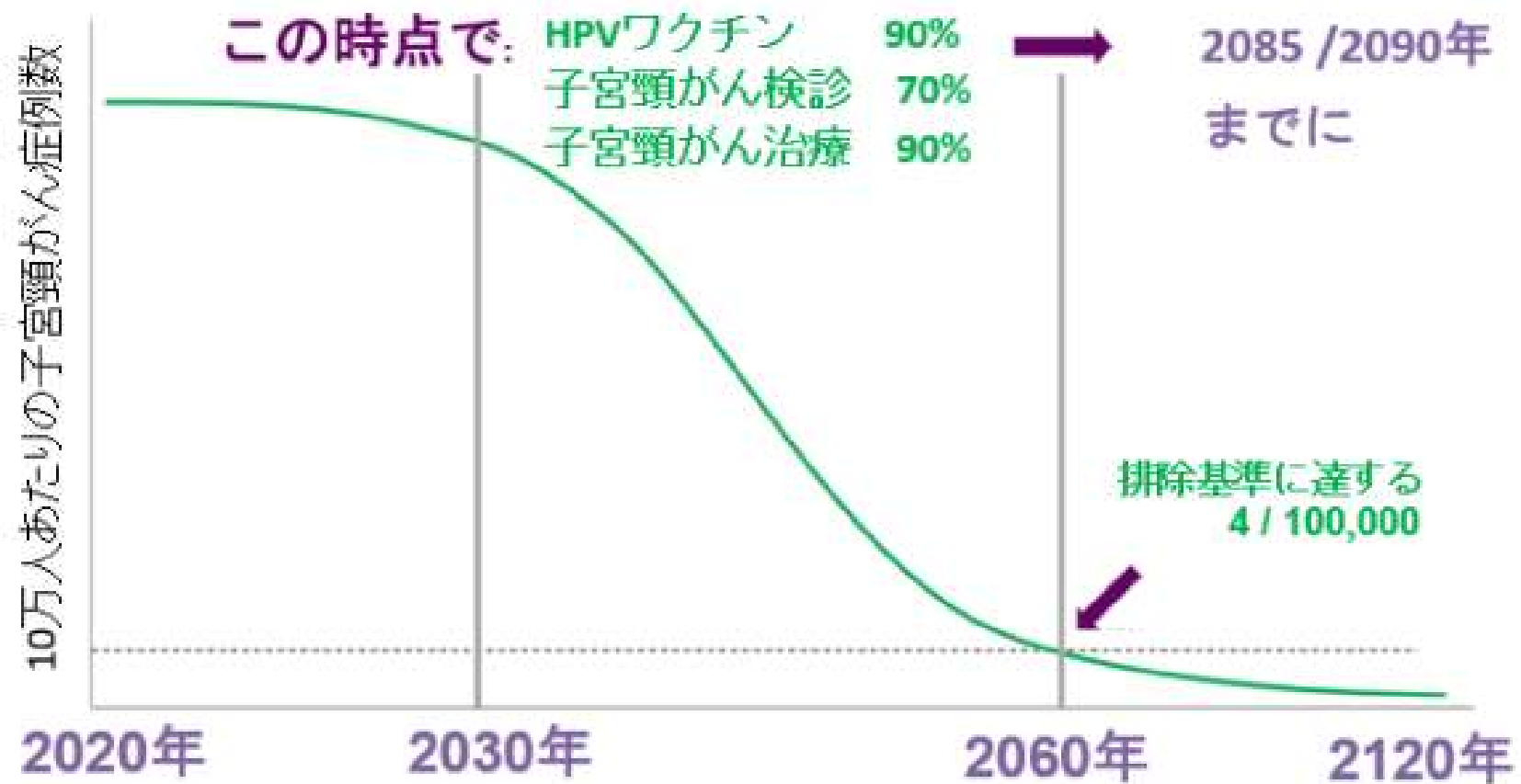
ショートレクチャー 2021.5.27

子宮頸がんは「**検診とワクチンで防げる唯一のがん**」とされ、世界的には減少傾向にある。

2019 WHOは公衆衛生上の問題として、「子宮頸がんを排除できる予防戦略」を公表した。

- ・ **15歳までに90%の少女が**
HPVワクチン接種を受ける
- ・ **35歳と45歳で70%の女性が**
確実性の高い頸がん検診を受ける
- ・ **子宮頸がんと診断された女性の90%が**
適切な治療を受ける

2030年にHPVワクチン、子宮頸がん検診、子宮頸がん治療のそれぞれの介入が、増加した場合の変化



日本では先進国で唯一、子宮頸がんが増加中。

罹患率 14.7人/10万人 vs 欧米6~8人/10万人

女性の78人に一人が罹患

年間約1万人が罹患し、約2800人が死亡

→毎日8人の女性が亡くなっている

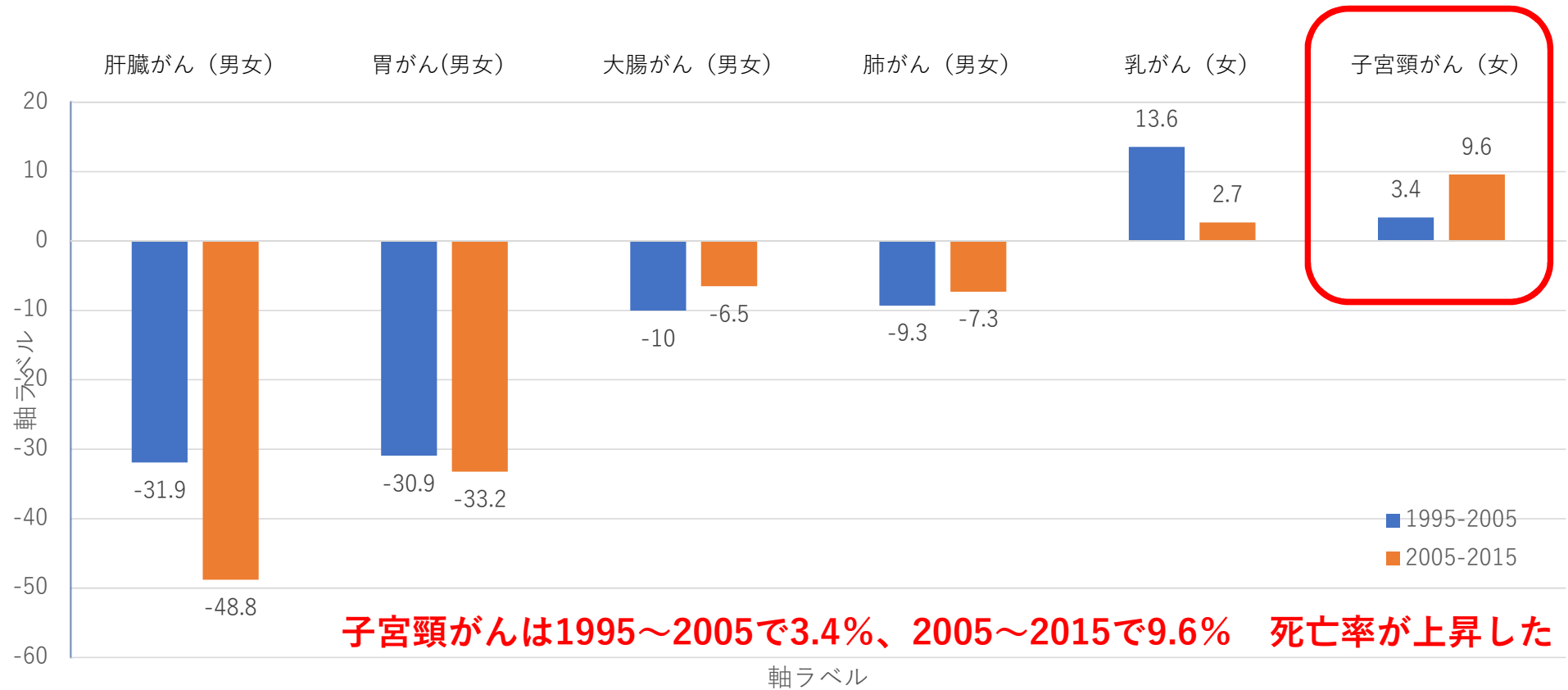
ほかのがんが減少、あるいは増加が止まっているのに比べても、顕著な傾向

特に若い世代での罹患率の上昇が問題

「マザー・キラー」とも。

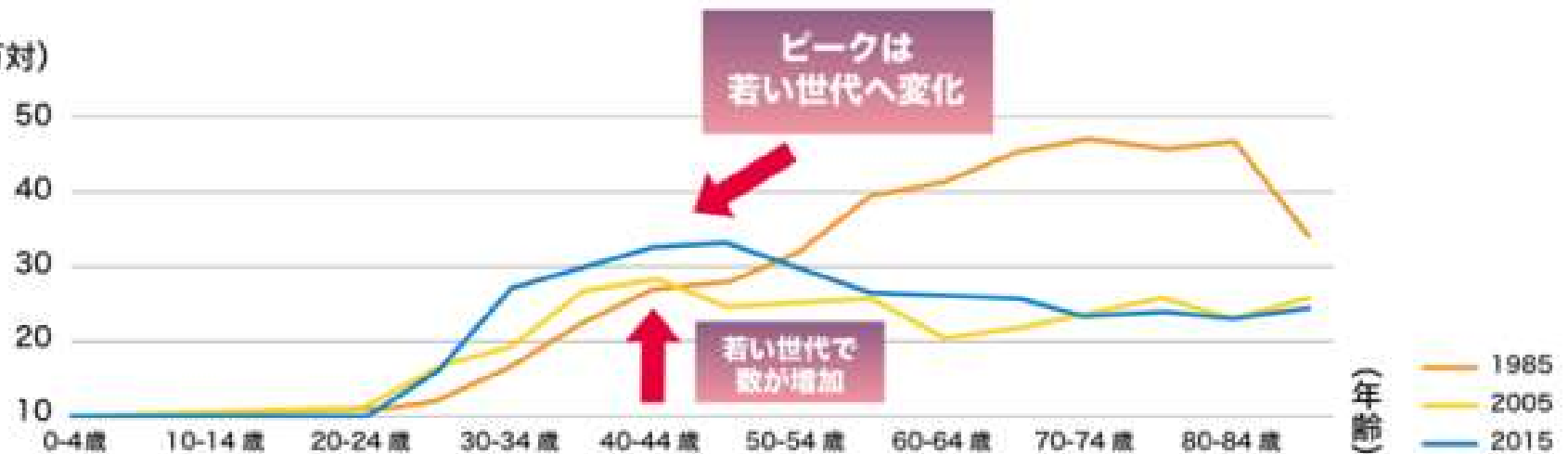
～社会として、予防戦略を考える必要がある

おもながんの年齢調整死亡率の変化 (国立がん研究センター)



子宮頸がんの年齢階級別罹患率 (上皮内がんを含まない)

(人口10万対)



- ◆子宮頸がんは若い人がかかる病気に変化しています
- ◆30歳代で子宮頸がんになる人も増えています
- ◆子宮頸がんになると治療が必要となり、妊娠に影響します

(出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」データから子宮頸がんとしての報告数より作図)

© ISOG All Right Reserved

日本と世界の子宮頸がん予防の現状

がん検診

先進国では70-80%が受診

…日本では40%

細胞診（感度70%）単独より

HPV検査併用（感度100%）に

細胞診は2次検査で行う国も

費用対効果で年齢上限もあり

…検診方法、間隔、上限も含め、

まだ十分な検討がされていない

HPVワクチン

世界124か国で定期接種化

より若い年齢で開始

男女接種も27か国で始まる

9価ワクチン導入

3回接種→2回にした国も

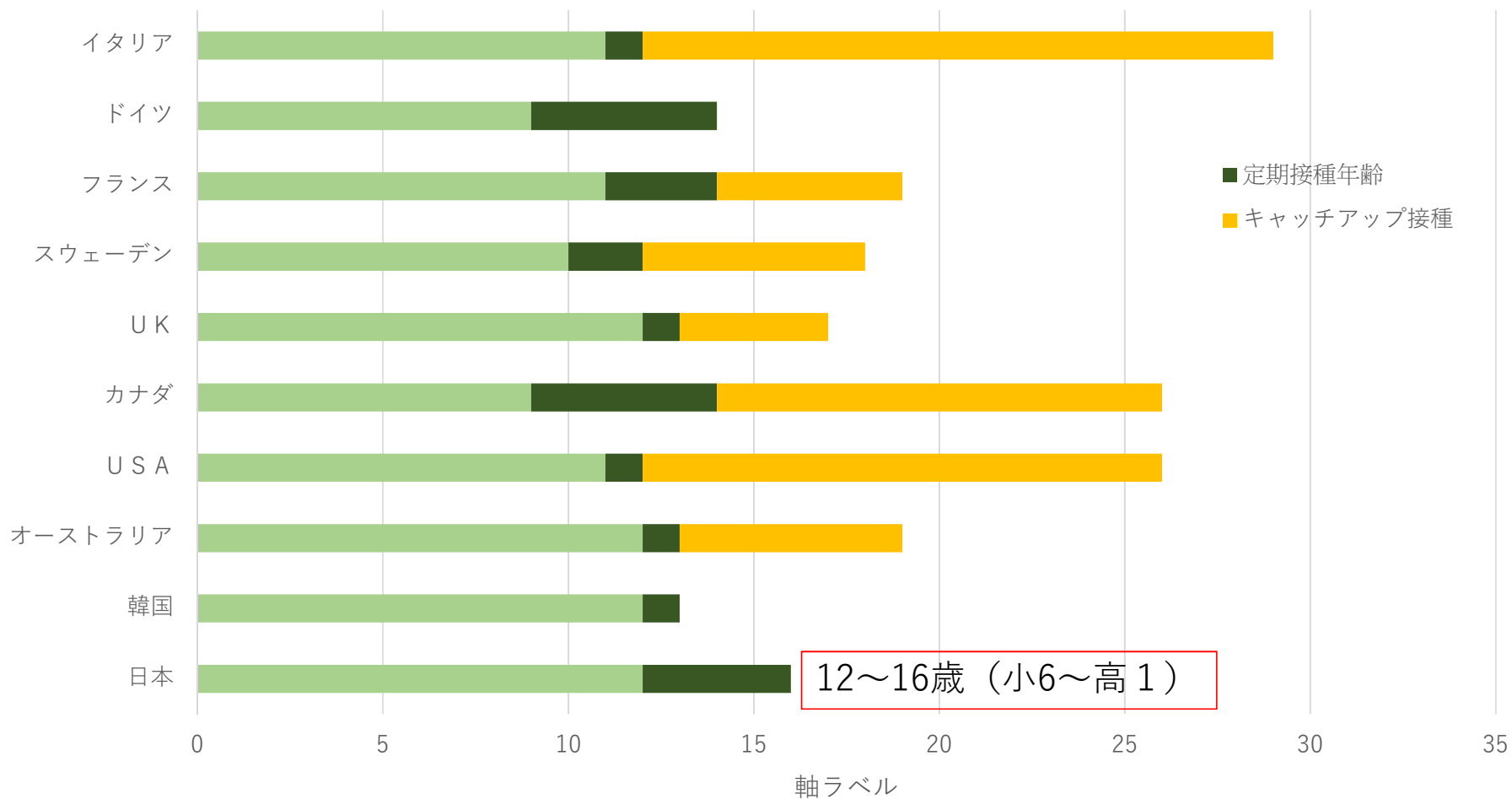
…定期接種ではあるが

積極的勧奨中止

結果、接種率70%→1%未満

世界の定期接種年齢

14歳までがほとんど



日本でのHPVワクチン接種の動き

2009 2価ワクチン発売開始

2010 公費負担開始

2011 4価ワクチン発売開始

2013.3月副反応報道

2013.4月 定期接種化

接種率70%

2013.6月 厚生省 積極的勧奨中止

2019末 「定期接種は必要」と見解

接種率1%未満に
なったまま

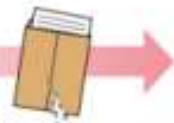
2020.10月 「個別に情報提供を」の通達

ワクチン接種後の副反応について

- 2015 厚生労働省の副反応検討部会報告で、接種後の多彩な症状は「機能性身体症状」であるとの見解がされた。
約338万人対象（延べ890万回接種）
→未回復症例 約5人/10万人（0.005%）
- 全国疫学調査で、思春期の女子にはワクチン接種の有無にかかわらず、多様な症状を呈する人が一定数見られることも判明している
- しかし、ワクチン接種後の局所の疼痛や不安などが機能性身体症状を引き起こすきっかけとなったことは否定できない。
- 苦しんでいる若い女性を支えるため、現在、接種後に何らかの症状が現れた方のための診療窓口が全国90か所あり、各診療科間の連携や高次拠点施設への紹介など体制も整備されている。
- WHOはワクチン安全性に関する専門委員会GACVSが継続的にデータを解析し、「安全性は極めて高い」との見解を出している

名古屋スタディーについて

71,177人を対象としたアンケート調査
(29,846人回答)



対象:
1994-2001年産生まれの女子
※HPVワクチン無料接種対象者

質問内容

◆「24項目の症状」の有無

24項目の症状による病院受診の有無・頻度、
学校の出席に影響したか等

24項目の症状

1	月経不順	13	なかなか眠れない
2	月経量の異常	14	異常に長く寝てしまう
3	関節やからだが痛む	15	皮膚が荒れてきた
4	ひどく頭が痛い	16	過呼吸
5	身体がだるい	17	物覚えが悪くなった
6	すぐ疲れる	18	簡単な計算ができなくなった
7	集中できない	19	簡単な漢字が思い出せなくなった
8	視野の異常	20	身体が自分の意志に反して動く
9	光を異常にまぶしく感じる	21	普通に歩けなくなった
10	視力が急に低下した	22	杖や車いすが必要になった
11	めまいがする	23	突然力が抜ける
12	足が冷たい	24	手や足に力が入らない

結果

24項目全ての症状において、ワクチン接種後にその発症が増える結果は得られなかった。
また、ワクチン接種者では、3つの症状（月経量の増加・月経不順・ひどい頭痛）で病院への受診が増えたが、生物学的関連性に起因するものとは考えにくい。

結論

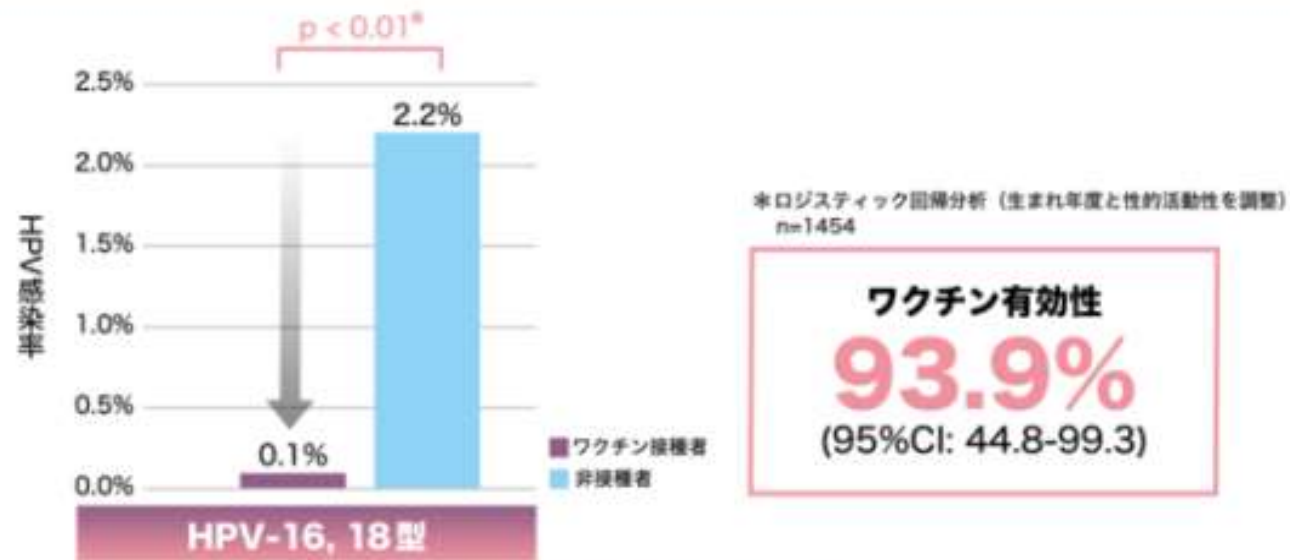
HPVワクチン接種と、
報告されている24の症状発生
との間に因果関係は示されな
かった。

ワクチン接種の効果について

- 日本では、日本医療研究開発機構AMEDの事業として大阪や新潟で調査が行われた。
- NIIGATA STUDYは、本邦では初めてHPVワクチンの感染予防効果を報告した。これは公的記録とワクチン接種歴を照らし合わせたものとして、評価されている。
- その後松山市、秋田県などの報告で、ワクチンによる子宮頸癌の前がん病変の減少も明らかになっている。
- 海外では、HPV16/18型への予防効果とそれによる前がん病変の発生の予防効果は100%に近いとされている。
- 昨年初めて、浸潤がんの減少効果をスウェーデンが国家規模の調査（167万人）で発表している。

NIIGATA STUDY

HPV-16, 18型に対する子宮頸がんワクチンの効果



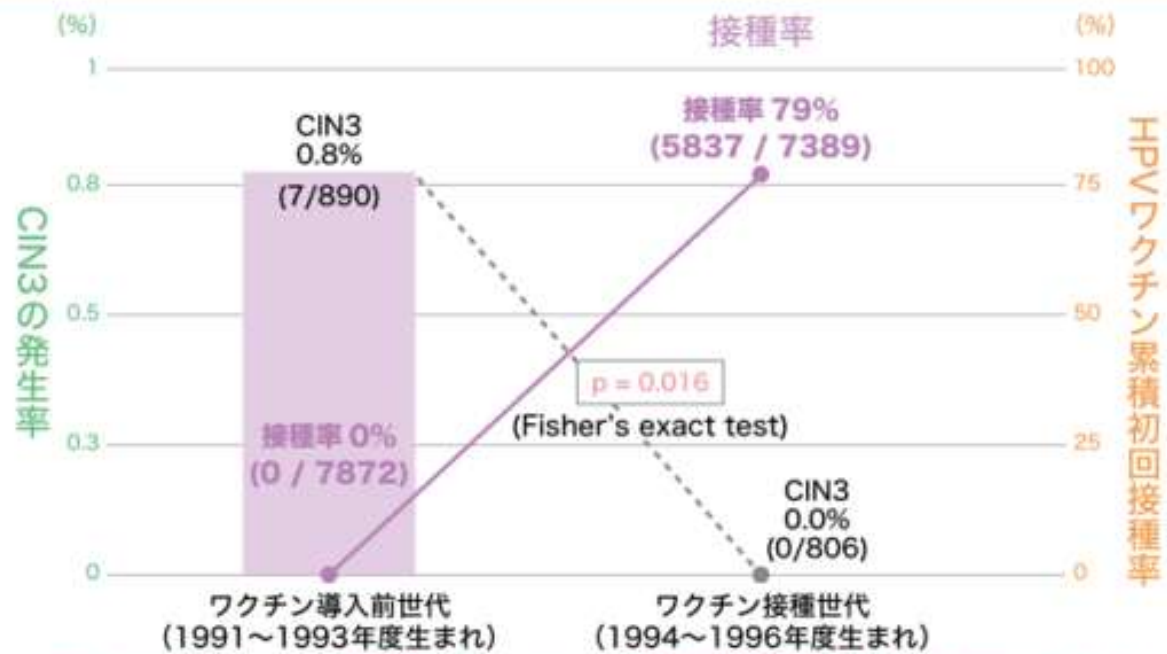
子宮頸がんワクチンは
初交前に接種するとより効果的

(出典: Niigata Study, Kudo R, Yamaguchi M, et al, J Infect Dis. 2019 より作図)

©ISOG All Right Reserved

MINT STUDY

20歳における前がん病変（高度異形成・上皮内がん：CIN3）の発生率



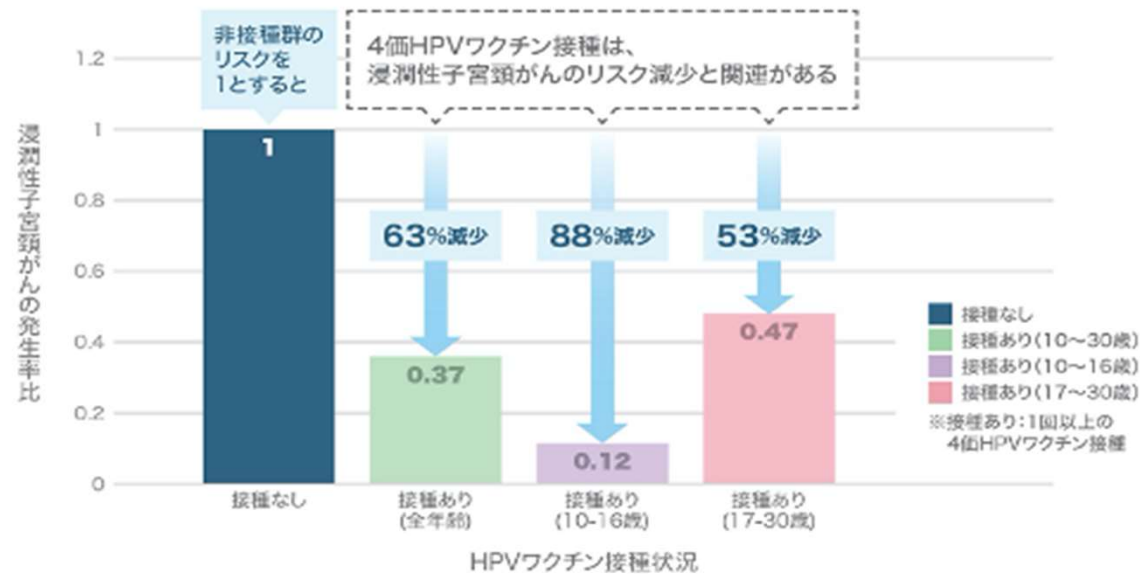
HPV ワクチン接種世代では、子宮頸部前がん病変が減少

(出典：Yagi A et al. Vaccine.2019 より作成)

© ISOG All Right Reserved

スウェーデン 167万人の調査

HPVワクチン接種の浸潤性子宮頸がん減少効果¹



17歳になる前に接種した場合、浸潤性子宮頸がんになるリスクが**88%**低下

▶▶ 若年での接種の方がより効果的である

(出典: Lai J, et al. N Engl J Med. 2020 Oct 1;383(14):1340-1349より作成)

まとめると

- 子宮頸がんは、検診とワクチン接種で排除できるがんである。
- 海外では、HPV検査を加えた確実性の高い検診に加え、若い年齢から予防接種プログラムが施行され、効果を上げている。
- 先進国で唯一、日本は子宮頸がんの罹患率が増加している。
- 2013.4月より予防接種法による定期接種であることには変わらないが、積極的勧奨の差し控えが継続され、70%以上であった接種率が、現在1%未満となり、今後子宮頸がんの増加が危惧される。
- がん検診率の増加と早期からのHPVワクチン接種が急務であり、罹患率が増加している若い世代へのアプローチが望まれる。